

【研究報告】

高齢者の地域ボランティア活動意欲と参加条件に関する文献検討

藤谷未来* 西片久美子*

【要 旨】

本研究の目的は、文献検討により高齢者の地域ボランティア活動への参加意欲と条件を明らかにすることである。対象の31文献から、地域ボランティア活動の意欲と条件について記載されている内容をコード化し、類似するものをグループ化したところ、参加意欲では【利己的動機】、【利他的動機】、【義務的・使命的動機】、【宗教的理由】、【その他】に分類された。活動参加の条件では、【無理なく充実した活動】、【活動しやすい環境】、【個人的な活動条件】に分類された。高齢者が地域ボランティア活動に参加する際は利他的動機以外にも様々な動機があること、健康であることやアクセスの良さ等が条件となることが示された。これにより、高齢者を対象とした地域ボランティア活動の促進支援の際は、高齢者が複数の参加動機を有していることを踏まえ、健康状態や高齢者のニーズに合った支援が必要であることが示唆された。

【キーワード】 高齢者, ボランティア, 地域

【利益相反】 本研究において開示すべき利益相反関連事項はない。

I. 序論

高齢者の健康寿命の延伸や、地域で自分らしい生活を送ることに寄与する社会活動の1つにボランティア活動が挙げられる。ボランティア活動は身体的・精神的健康をもたらす(藤原, 杉原, 新開, 2005)だけではなく、生きがい感が上昇したという報告(津田, 2013)もある。

2015年の介護保険制度の改正ではボランティアによる生活支援サービスを促進する仕組みが制度化されるなど(公益財団法人さわやか福祉財団, 2019)、高齢者のボランティア参加に対して需要が高まっている。しかし海外と比較すると日本は、高齢者や障がい者の話し相手等のボランティア活動に参加している高齢者が3.8%と少ない状況にあり(大上, 2015)、高齢者がボランティア活動に参加できる取り組みが必要と言える。ボランティアという言葉の語源は、意志(英語でいうWill)を意味するラテン語のVolが語源であることより(大阪ボラン

ティア協会, 1997, p.3)、ボランティアは、自発性・主体性が基本的・根源的性格であると言える(岡本, 2005, p.24)。そのため、参加を促す際にも、本人の参加意欲が高まるような支援や、活動参加に適した環境整備等、高齢者の活動参加条件を整えることが必要と考えた。高齢者は、加齢性変化や疾患を抱えやすい特徴を有していることから、日常生活への支障もきたしやすいため、ボランティア活動に参加するには様々な条件があると考えられる。そのため、文献検討によって高齢者の地域ボランティア参加意欲だけでなく、参加に必要な条件も明らかにし、高齢者の自発的な地域ボランティア活動への参加を促進する支援を検討する一助にしたいと考えた。

II. 目的

本研究の目的は、文献検討により高齢者の地域ボランティア活動への参加意欲と活動参加の条件を明らかにすることである。

* 日本赤十字北海道看護大学

Ⅲ. 研究方法

国内文献における検索エンジンは、医学中央雑誌Web版Ver.5、CiNii、JDreamⅢ 科学技術文献情報データサービス、J-GLOBAL 科学技術総合リンクセンターを用いた。英語文献はCINAHL、MEDLINEで検索を行った。いずれも2020年までに発表された文献を対象とした。検索日は2021年1月17日である。

キーワードを「高齢者」「ボランティア活動」「意欲」とし、and検索した。英語文献では「older」「volunteer」「motivation」をキーワードにand検索を行った。さらに、「ボランティア」「参加」「条件」をand検索した。英語文献では、「volunteer」「participation」「condition」をキーワードにand検索を行い、いずれも原著論文で絞り込みを行った。文献の選択基準は、高齢者の地域ボランティア活動への参加意欲について、又は活動の条件について述べられているものとした。除外基準は①65歳未満のみを研究対象とした文献、②災害ボランティア等、非日常的で突発的な活動、及び病院ボランティア等活動内容を限局した文献、③会議録や学会発表資料等、論文化されていないものとした。1次スクリーニングでは、論文タイトルと要旨から選択基準を満たす文献を採択し、要旨だけでは判断が難しい場合も暫定的に採択とした。2次スクリーニングでは採択された文献の全文を精読し、選択基準と除外基準に基づいて文献を採択した。精読した文献において、地域ボランティア活動の意欲と条件について記載されている内容をコード化し、抽出したコードを類似するものでグループ化した。意欲は広辞苑（2018）によると「積極的に何かをしようという気持、種々の動機の中から或る1つを選択してこれを目標とする能動的意志活動」と説明されている。これにより本研究では活動意欲を「積極的にボランティア活動に参加しようとする気持ち」とし、動機も含みコードを抽出した。条件は三省堂国語辞典（2022）を参考に、本研究では「ボランティア活動に参加するために必要なことがら」と定義した。

引用した文献は文献リストに明確に示し、著作権に配慮し、文献は著者の意図を損なわないように注意深く精読した。

Ⅳ. 結果

文献検討の結果、国内文献14件、英語文献17件の計31件を採択した。

1つ目のキーワードの「高齢者/Older」「ボランティア活動/Volunteer」「意欲/motivation」の検索において採択した文献は15件であった。内訳は、国内文献が2件、英語文献13件である。国内文献では、医学中央雑誌Web版Ver. 5より抽出された論文は28件であり、CiNiiを用いて検索をしたところ13件が該当した。JDreamⅢ 科学技術文献情報データサービスで検索した結果は30件で、J-GLOBAL科学技術総合リンクセンターにおいて検索された文献で該当するものは見当たらなかった。英語文献はCINAHL、及びMEDLINEから153件が該当した。これらの検索エンジンから抽出された文献のうち、32件の重複がみられたためこれらを除外した141件が1次スクリーニングの対象となり、選択基準を満たした文献が109件となった。2次スクリーニングにより除外基準に該当した94件を除外し、残りの15件を採択した。15件の論文では、ボランティア活動の意欲について分析した論文（Kovacs, Black, 2000; Pardasami, 2018）や、ボランティア活動意欲の要因について検討した研究（金, 2004; Warburton, Paynter, Petriwskyj, 2007; Okun, O'Rourke, Keller, Johnson, Enders, 2015; deEspanés, Villar, Urrutia, Serrat, 2015; Principi, Schippers, Naegle, Di Rosa, Lamura, 2016; 桂, 佐藤, 2017; Park, Kim, Cho, 2017）等がみられた（表1-1）。

2つ目のキーワードである「ボランティア/Volunteer」「参加/participation」「条件/condition」で検索した結果、国内文献3件、英語文献2件の計5件が対象文献となった。国内文献では医学中央雑誌Web版Ver.5で検索したところ15件が該当し、CiNiiでは54件の文献が検出された。JDreamⅢ 科学技術文献情報データサービスでは92件が該当し、J-GLOBAL科学技術総合リンクセンターを用いた検索では428件が該当した。これにCINAHL、及びMEDLINEから抽出された247件を加えた836件のうち、重複した6件を除き、1次スクリーニングの対象は830件となった。選択基準を満たした文献は19件であり、2次スクリーニングにより14件が除外され、5件が採択された。5件の文献では、健康状態と高齢者のボランティア活動の相関関係を明らかにした研究（Principi, et al., 2016）や、この他高齢

表 1-1 キーワード「高齢者 /older」「ボランティア活動 /Volunteer」「意欲 /motivation」の文献 15 件

著者名 / 発表年	研究目的	対象者と研究方法	主な結果
Kovacs, P.J. Black, B. (2000)	ボランティアをする高齢者の動機は何か、どのようにボランティアの機会を得ているのか、満足するためには何が必要か、ボランティア活動が続けるために何が必要かの示唆を得る。	文献レビューにより、高齢者ボランティア、ホスピスボランティアに関連する、ボランティアの動機、満足、募集、保持に関する調査結果の一部をまとめている。文献の種類や検索方法については記載されていない。	高齢者のボランティア動機について、使命感や信念、宗教的理由などの複数の利他的動機が挙げられた。募集に関しては、友人を通して応募する人が多く、ボランティア活動を促進するような先輩やメンターの存在の必要性が言及されていた。活動の継続には、達成感や活動成果、コミュニティに貢献したいという気持ちが重要であることが示唆された。
金貞任 新開省二 熊谷修 藤原佳典 吉田祐子 天野秀紀 鈴木隆雄 (2004)	中高年の社会参加に影響を与える要因について分析する。	層化無作為抽出法により選択された 1568 名に自記式質問紙調査を行い、回答のあった 964 票を分析対象とした。社会活動性指標の 4 側面（仕事、社会・奉仕活動、個人活動、学習活動）の各得点を目的変数とし、説明変数に人口学的変数（性、年齢など）、健康指標（総合的移動能力、健康度自己評価）、社会・経済的指標（学歴、暮らし向き）、地域指標（居住地域、町内居住年数）、社会活動に関わる意識（社会参加の継続意思、行政支援の必要性、地域共生意識）をおき、目的変数と説明変数の相関を明らかにした。	重回帰分析の結果、社会・奉仕活動と関連が見られたのは、年齢が高い（ $\beta = 0.116$, $p < 0.01$ ）こと、居住地域が本村（ $\beta = -0.114$, $p < 0.01$ ）であること、地域共生意識が高い（ $\beta = 0.398$, $p < 0.001$ ）ことであった。
Warburton, J. Paynter, J. Petriwskyj, A. (2007)	ボランティア活動に対するインセンティブと障壁を明らかにする。	対象はオーストラリアの高齢者協会に登録している 50 歳以上のメンバーのうちランダムサンプリングされた 107 名。研究 1 では、文献から導き出されたボランティア活動に対するインセンティブと障壁について質問紙を用いてオンライン調査を行った。この結果を因子分析し、ボランティア活動のインセンティブと障壁の因子を抽出した。研究 2 は、フォーカスグループによる半構造化調査で、ボランティア活動のインセンティブと障壁についての意見を聞いた。	ボランティア活動を推奨するためのインセンティブとして、トレーニングを含むプログラム、世代間のボランティア活動の機会のなど個々のボランティアに向けられたインセンティブと、政策による保護、多様性を認める組織文化など構造の必要性の 2 つの因子が抽出された。障壁には、スキルや経験が活かせない、活動がつまらないといった個々のボランティアにとっての障壁と、年齢差別や若いボランティアが必要とされているなどの組織についての障壁の 2 因子が抽出された。これらの結果を基にインタビューを行った結果、因子分析の結果で抽出されたインセンティブを確保することは特に重要であることが示された。
Grano, C. Lucidi, F. Zelli, A. Violani, C. (2008)	自己決定理論 (SDT) の動機は、自己効力感の判断や計画的行動理論 (TPB) からの構成を含む一連の社会認知プロセスに影響を与えるという仮説から、本研究では、イタリアの高齢者における経時的なボランティア活動の変化に焦点を当てている。	イタリアの 60 歳から 90 歳の高齢ボランティア 615 名を対象にアンケート調査を行い、評価 3 ヶ月後に電話インタビューを行った ($n=574$)。調査内容は属性と SDT 変数（内発的規制、統合された規制、同一化された規制、導入された規制、外部規制、動機なし）、TPB 変数（行動への態度、主観的規範、知覚された行動制御、ボランティア意向）、自己効力感、ボランティア動機、過去 3 ヶ月のボランティア活動状況である。これらの相関分析とパス解析を行った。	ボランティアへの意向に影響している因子は、行動への態度、主観的規範、知覚された行動制御、自己効力感、統合された規制 ($R^2=0.18 \sim 0.79$, $\beta = 0.12 \sim 0.44$, $p < 0.05$) であった。これにより、SDT 因子と TPB などの社会認知フレームワークが統合することにより、高齢者ボランティアの意向の予測因子を洞察できることが示唆された。
Witucki Brown, J. Chen, S. L. Mefford, L. Brown, A. Callen, B. McArthur, P. (2011)	高齢者がボランティア活動に参加するプロセスについて説明すること。	困っている人々に手頃の家を建てるのを手伝うボランティアである Habitat for Humanity に志願した高齢者の 40 名を対象に、ボランティアになるプロセスを明らかにするためにインタビューを行った。	高齢ボランティアのボランティアになるための動機には母の姿をみて、隣人同士助け合う環境で育ったためといった「継続性」、親切にすることに責任を感じる、神はやるべきだと示しているといった「コミットメント」、市民の一員と感じることは良い気持ちだなどと言った「結びつき」が抽出された。さらに、高齢ボランティアは健康と資金が許す限り、身体的および経済的に「助け」る様子が見られた。ボランティア活動によって得られる「祝福」と呼ばれる利点は、ボランティア活動継続の動機付けとなっていた。
伏木康弘 大西浩文 大浦麻絵 尚和里子 坂内文 北澤一利 森満 (2012)	地域ボランティア参加意欲を持つ高齢者の特性について、地域に在住する高齢者を対象として検討する。	北海道の石狩、空知振興局管内 4 市 3 町に在住する高齢者（65～84 歳）を対象にしたアンケート調査で、有効回答は 1944 件であった。	ボランティア意欲を持つ要因として高次の日常生活動作能力を有すること、積極的に社会参加していること、健康志向が高く、健康不安が無いことなどが示唆された。一方で転倒の不安が強いことや、高血圧や脳卒中などの既往が有ることはボランティア意欲低下に関連する可能性が示された。
Principi, A. Warburton, J. Schippers, J. Rosa, M. D. (2013)	働くボランティアと無職の高齢ボランティアの動機の違いを特定する。	オランダ、ドイツ、イタリアの 3 か国における、50 歳以上の働くボランティアと無職のボランティア 955 名を対象とした。調査内容は、仕事の状況、年齢、性別、婚姻状況、経済的状況、健康状態と学歴で、ボランティアの動機の測定に VFI 尺度 (Clary, 198) を用いて、働くボランティアと無職のボランティアの二変量分析を行った。	ボランティア動機のうち、エゴを否定的な感情から守りたいという保護因子において、退職したボランティアよりパートタイムが高く ($r=0.95$, $p < 0.05$)、フルタイムが低かった ($r=-0.14$, $p < 0.001$) ことや、キャリア因子においては退職ボランティアよりパートタイムとフルタイムが高かった ($r=0.85$; $r=0.58$, $p < 0.05$) ことから、仕事の状況がボランティアへの動機付けに大きな影響を与えることが示された。
de Espanés, G. M. Villar, F. Urrutia, A. Serrat, R. (2015)	ボランティアをする動機とコミットメント、ジェネラティビティの関係を明らかにする。	サンプルは、アルゼンチンのコルドバ市の 5 つのボランティア組織から意図的に選ばれた 200 人のボランティアである。参加者は、18～39 歳、40～59 歳、60 歳以上の 3 つの年齢グループに割り当て、重回帰分析を行った。	ボランティアの動機の中でも、「価値」と「理解」の動機が高かった。ボランティアへの動機付けとコミットメントにおいて、年齢層間に関連する違いはなかった。ジェネラティビティは、ボランティアへの動機全ての因子との関連が見られ ($F=5.28 \sim 32.33$, $p < 0.05$) とコミットメントの予測的価値を示した ($F=31.14$, $p < 0.001$)。

表 1-1 キーワード「高齢者 /older」「ボランティア活動 /Volunteer」「意欲 /motivation」の文献 15 件（続き）

著者名 / 発表年	研究目的	対象者と研究方法	主な結果
Okun, M. A. O'Rourke, H. P. Keller, B. Johnson, K. A. Enders, C. (2015)	スピリチュアル・宗教を信仰することはボランティアの動機付けとなるのかを調査する。	1957 年にウィスコンシン州の高校を卒業した青年を対象とした縦断研究のデータを使用し、2004 年以降も存命していた 8148 名をサンプルとした。調査内容は、過去 10 年以内のボランティア活動の有無、ボランティアの動機 (VFI)、教会へ行くなどの宗教性、自分がどれほど霊的か、スピリチュアルがどれほど大事かを問う項目などをスピリチュアリティとし、動機とボランティア活動の予測度を調べるために、それぞれ重回帰分析とロジスティック回帰分析を行った。	ボランティア活動の動機との関連を重回帰分析した結果、宗教性が $r=0.284$ 、スピリチュアリティが $r=0.277$ であった (いずれも $p < 0.001$)。ボランティア活動の予測率は、ロジスティック回帰分析により、宗教 ($r=0.959$, $p < 0.001$) と動機 ($r=0.258$, $p < 0.001$) が正の相関を示し、スピリチュアルが ($r=-0.164$, $p < 0.001$) 負の相関を示した。この他、働くこと、飲酒、教育、純資産、外向性などがボランティア活動の可能性を高く示しており、対照的に、年齢、神経症などがボランティアの可能性が低いと行った結果が示された。
Principi, A. Schipper, J. Naegle, G. Di Rosa, M. Lamura, G. (2016)	ボランティアへの動機付けの力に対する高齢のボランティアの利用可能な人的、社会的、文化的資本の影響を調査する。	ヨーロッパにおける 50 歳以上の高齢ボランティアによる大規模データベースから 955 名を対象としている。ボランティアの動機については VFI 尺度 (1998) を用いた。人的、社会的、文化的資本との関係を重回帰分析を用いて調査した。	教育レベルが中等度・高度 ($\beta = -0.25 \sim -0.41$, $p < 0.001$)、健康状態が良い ($\beta = -0.26$, $p < 0.05$) といった因子が VFI の価値・保護といった利己的動機と負の相関を示したことや、未亡人、離婚、独身 ($\beta = 0.25 \sim 0.39$, $p < 0.001$) が保護と正の相関を示したことから、人的資本と社会的資本の量が少ない属性を持った人は、自尊心を高めるために志願する傾向が高いことが示唆された。
桂 理江子 佐藤 直由 (2017)	社会活動を行っている高齢者の参加に関連する要因を検討すること。	仙台市において無作為に抽出した 65 ～ 84 歳の高齢者に対し自記式調査を行った。分析対象者は自立している 222 人 (平均年齢 71.7 歳)。趣味、スポーツ、学習活動、ボランティアの 4 つの社会活動の活動状況別に基本属性、身体的・社会的状況、活動認知状況等と比較・検討した。	重回帰分析の結果、社会活動が活発な高齢者の特徴として、暮らし向きが普通以上であること、外出等への誘いがあること、スポーツおよび学習活動への活動参加意向があることが明らかとなった。
Park, S. Kim, B. Cho, J. (2017)	虚弱な高齢者の住環境によるボランティア活動への影響を調べる。	ミシガン大学で 2012 年に実施された健康と退職に関する研究 (HRS) のデータと老化研究センターのデータ (RAND HRS) を組み合わせた上で、データから 65 歳以上の一人暮らしで経済的に裕福ではない 1425 名を抽出し対象とした。対象者にボランティアの頻度と住環境についてを尋ね、共変量に性別や人種などの属性を投入し共分散分析を行った。	高齢者向け住宅に住むことは、属性および個人的および環境的側面の特性を制御するときに、ボランティア活動と有意に正に関連していた ($OR = 1.47$, $p < 0.05$) ことから、個人的および環境的要因を調整した高齢者住宅での生活は、ボランティア活動に積極的な影響を与えることが考えられる。
Dury, S. (2018)	タイムクレジットと引き換えにサービスを受け取る仕組みのタイムバンクボランティアにおいて、ボランティアを開始、継続、および辞める理由を明らかにする。	フォーカスグループインタビューを含む計画的な前向き縦断研究を使用して、1 年間の 4 つの時点 (開始時、4 か月後、8 か月後、11 か月後) でボランティアのグループに動機についてのインタビューをした。対象者は、ベルギーのブリュッセルでタイムバンクボランティアである。ボランティアは 5 名から始まり、最終的には 13 名に活動者が増えたため、1 回目のインタビューは 5 名、2 回目は 6 名、3 回目のインタビューでは 8 名中 5 名が参加しており、4 回目には全てのボランティア 13 名が参加した。分析にはソフトウェアを用いたテーマ別コンテンツ分析を行い、時間の経過と動機の変化について着目した。	初めて活動を開始する理由としては「ほかの人を助けるのが好きなので」などの利他的で社会的な理由が多かった。社会的理由の中には、自尊心を高め、必要と感じ、自分の気分を良くするといったものも見られた。活動の継続において重要な要因であったのは、共同制作 (プロジェクトの設計にボランティアを参加させる) およびアテンションオフィサー (ボランティアの相談にのる親友) がいることであった。さらに、活動を辞める理由としては、より専門的なサービスの必要性を感じたといった理由や、受益者からの感謝の欠如、受益者からの過剰な要求などが挙げられた。
Pardasani, M. (2018)	米国のシニアセンター参加者のボランティア活動への関心と動機を明らかにする。	ニューヨークのシニアセンターに通う高齢者 172 名に調査表を用いて、属性やボランティア活動状況、ボランティアの動機を尋ねた。さらに、このうち 68 名がフォーカスグループセッションに参加し、ボランティアの動機やボランティア活動により得られる利益について話しあってもらった。属性や活動状況と意欲については相関を、フォーカスグループセッションについては、話し合いの中味を内容別にまとめ、コード化して分析を行った。	属性では、女性、69 歳以上の人、最終学歴が大学院の人、年収 5 万ドル以上の人などがシニアセンターを通じてボランティア活動を行っていることが示唆された。フォーカスグループセッションでは、ボランティアの動機や利益について話し合われた結果、社会への恩返しへの気持ちや、空いている時間に何か意味のあることをしたいといった気持ちが示された。また、ボランティア活動を通して得られる利益については、楽しい活動だから、仲間作りになるなどが挙げられた。
Withall, J. Thompson, J. L. Fox, K. R. Davis, M. Gray, S. De Koning, J. Stathi, A. (2018)	高齢者の社会的孤立を予防する目的のピアボランティアによる外出支援研究である ACE を洗練するために高齢ボランティアとボランティアマネージャーからのフィードバックを得る。	ボランティアサービスの受け手となった参加者と、経験豊富な 60 歳以上のボランティア、高齢者との仕事経験のあるボランティアマネージャーの 3 グループ (高齢者 28 名、マネージャー 4 名) を対象に、インタビューと半構造化面接、フォーカスグループインタビューを行った。参加した経験を振り返ってもらい、活動の動機や促進要因、障壁などについて話し合ってもらった。	高齢者が活動に参加したのは社会的理由からだった。阻害要因は単独での出席、悪天候、アクセスの難しさであった。ボランティア活動に従事する高齢者の動機は、孤独を避け必要とされる。楽しみがあるなどの理由が挙げられた。

者の社会参加ニーズを明らかにした研究(Levasseur, Routhier, Clapperton, Doré, Gallagher, 2020)、ボランティア活動への参加条件を検討した文献(高橋, 柴崎, 永井, 2003; 服部, 2011; 福島, 2020)が抽出された(表1-2)。以上20件の採択論文に、ハンドサーチで得た文献11件(表1-3)を加えた計31件を分析対象とした(図1)。

対象の31文献の年次別研究論文数は、1990年代が2件、2000年代が11件、2010年代が16件、2020年代が2件であった。

対象文献から地域ボランティア活動の意欲と条件について記載されている内容をコード化し、抽出したコードを類似するものでグループ化した。その結果について【】をカテゴリー、〈〉をサブカテゴリー

として以下に記述した。活動意欲は【利己的な動機】、【利他的な動機】、【義務的・使命的動機】、【宗教的理由】、【その他】の5つのカテゴリーに分類された(表2-1)。活動の条件は【無理なく充実した活動】、【活動しやすい環境】、【個人的な活動条件】の3つのカテゴリーに分類された(表2-2)。

1. 参加意欲

高齢者のボランティア活動の参加意欲としてみられたのは、自身の自己実現のためや、時間に余裕がある等という【利己的な動機】と、他者を助けるため等の【利他的動機】、【義務的・使命的動機】、【宗教的理由】等である。

【利己的な動機】では、桜井(2002)がボランティ

表 1-2 キーワード「ボランティア/Volunteer」「参加/participation」「条件/condition」の文献 5 件

著者名/発表年	研究目的	対象者と研究方法	主な結果
高橋美保子 柴崎智美 永井正規 (2003)	老人クラブ会員の社会活動レベルから、高齢者の社会活動に影響を与える環境条件を検討する。	埼玉県内 O 市内の老人クラブに所属する高齢者 115,731 名を対象とした質問紙調査。個人活動や社会参加・奉仕活動、仕事および学習活動について「活発」「ふつう」「不活発」の 3 群にまとめて集計し、他県から無作為抽出した基準集団と比較した。	基準集団に比べて老人クラブ会員は「個人活動」「社会参加・奉仕活動」の活発度が高く、特に女性会員にこの特徴が顕著であった。居住地域によって社会活動の活発度が異なり、交通機能の充実した市街地に居住する対象者は社会参加が活発であった。これらのことから、高齢者の社会参加には、老人クラブの入会、交通の便などの環境条件が示された。
服部愛子 畑瀬友紀子 平野千晶 藤村薫 前原佳織 松本彩花 光井絵里 宮園知子 吉中愛美 小田美紀子 落合のり子 (2011)	A 地区住民の地区活動参加状況とその条件を明らかにする。	A 地区住民のボランティア活動の等の活動へ参加している 108 名(平均年齢 66.8 歳)を対象に質問紙調査を行った。分析は単純集計を行った。	地域活動への参加条件として、健康であること、家族の理解と協力があること、身近な人と一緒に参加できること、活動場所が自宅に近いこと、活動する時間的余裕があること等が挙げられた。このことから、個人や家族の健康を保持・増進し、地域の人々のつながりを強く、時間・場所・移動手段を工夫し住民が集いやすくなる支援が必要であることが示された。
Principi, A. Galenkamp, H. Papa, R. Socci, M. Suanet, B. Schmidt, A. Schulmann, K. Golinowska, A. Sowa, A. Moreira, A. Deeg, D. J. (2016)	健康状態と高齢者のボランティア活動の相関関係を明らかにする。	ヨーロッパ 16 カ国在住の 50 歳以上の退職者調査のデータを使用した。対象者 56,868 人に、健康状態や身体能力、疾患の有無、直近 1 年間のボランティアの活動状況、教育レベルや経済状況などの人的資本、活動への参加状況などの社会資本、宗教活動などの文化資本について自記式質問紙調査を行った。分析は、対象者の健康状態を健康上の問題なし、軽度の健康問題を有する、重度の健康上の問題を有する 3 群に分け多変量解析を行った。	うつ病の症状はボランティア活動への関与とマイナスの関連が見られた。特に健康状態の悪い高齢者のボランティア活動と未亡人であることの肯定的な関連がある一方で、高所得は、軽度の健康上の問題の場合にのみボランティア活動への参加と関連が示された。
福島忍 (2020)	高齢者の社会貢献活動の活動状況、活動参加のきっかけや条件を検討する。	東京都 A 市にある集合住宅に居住する高齢者 330 人を分析対象としている。無記名自記式質問紙による調査で、性別や活動意向別に χ^2 検定を用いて比較検討を行った。	活動参加のきっかけとして男性で一番多かったのは「行政や社協などによる募集」であり、女性では「家族や他者からの勧め・誘い」であった。条件は男女ともに「友人・知人と一緒にできること」「自らの健康状態がよくなること」が多かったが「通う手段が確保されている」は女性に有意に多かった。
Levasseur, M. Routhier, S. Clapperton, I. Doré, C. Gallagher, F. (2020)	農村部などの地方に住む高齢者の社会参加ニーズを特定し、優先順位を付ける。	農村地方の地方自治体におけるアクションリサーチ。対象者は、カナダのケベック州東部に位置する 2 つの小さな都市と農村に居住する 65 歳以上の成人、高齢者の介護者、医療従事者などの 139 名である。「活動に参加するのに役立つものは何か」「何があなたを妨げるのか」「全体として、地域社会での活動に参加するために必要なものは何か」について半構成的に話を聞き、ニーズを特定した。さらに、アンケート調査において優先順位がわかるように社会参加ニーズについて尋ねた。	社会参加の促進と障壁は、健康などの個人的な要因に関連している。この他、関心、動機、社会環境、および物理的な環境が重要であることが示唆された。社会参加のニーズは 9 つが抽出され、大きく 3 つに大別された。1 つは、アクセシビリティなど物理的環境に合った活動のニーズ、2 つ目は活動についての情報提供や個人的な誘いなどの活動開始のニーズ、3 つ目は支援や評価であった。また、優先順位の高いニーズとして、1) 交通機関についての情報にアクセスできること 2) 利用可能な活動やサービスについての情報を得ていること 3) 興味、スケジュール、コスト、健康状態に適した活動などが挙げられた。

表 1-3 ハンドサーチの文献 11 件

著者名 / 発表年	研究目的	対象者と研究方法	主な結果
Okun, M.A. (1994)	高齢者のボランティアの頻度に対するボランティア動機の影響を明らかにする。	1991 年にペンシルベニア州で実施された調査で収集したデータから、60 歳以上の 962 名を対象とし、このうち過去 1 年間にボランティア活動を行った 435 名を分析対象とした。分析方法はロジスティック回帰分析である。	ボランティアの動機について尋ねた際、最も多かったのが他者を助けるため (83%)、次いで生産的である (65%)、道徳的義務が 51% であった。また、対象者の 78% がボランティアの主な理由として 2 つ以上の動機を支持していた。ボランティアが役に立つ、生産的であるといった動機を持って参加するボランティアは、月に 2 回以上の活動を行う確率を 2.11 倍にする結果となった。また、道徳的義務を果たすために行うボランティアは、月 2 回以上ボランティア活動を行う確率を 1.38 倍にする。この結果から、役に立つ、生産的であると感じたいという願望や、道徳的義務を果たすためにボランティアを行う高齢者は、ボランティア活動を頻繁に行う可能性があることが示唆された。
日下菜穂子 篠置昭男 (1998)	中高年者のボランティア活動への参加の様相を明らかにし、その意義を問うことを目的とする。	兵庫県下の 4 市でボランティア活動に参加している 40 歳以上の中高生を対象に、ボランティア活動観、サポート提供の満足度、自尊感情について質問紙を用いて尋ねた。	因子分析の結果、ボランティア活動観については、余暇因子、社会的貢献因子、自己実現因子が抽出された。ボランティア活動観と自尊感情、サポート提供満足度の分散分析と、自尊感情とサポート提供満足度得点との相関から、ボランティア活動を行い高い満足度を得ることで、自尊感情は高められるという結果が示された。
跡田直澄 福重元嗣 (2000)	ボランティア活動への参加確率や活動時間について、その決定要因を明らかにする。	首都圏及び長野県と大分県で調査された中高年 (40 歳以上) の生活状況と社会保障の機能に関する調査 (国立社会保障・人口問題研究所) の個票 (n=1820) をもとに、計量経済学的分析を行った。	首都圏と大分県のデータから、学歴の重要性がうかがえた。さらに、首都圏のデータから機会費用 (同一期間中に最大利益を生む選択と、それ以外を選択した場合の利益の差) がボランティア活動に影響を与えていた。この結果から、学歴や賃金率といった経済学的な要因がボランティア活動に影響を与えていることが示唆された。
Bowen, D. J. Andersen, M. R. Urban, N. (2000)	高齢女性のボランティアと非ボランティアの属性および健康特性の違いを示すこと、ボランティアしている方と過去にボランティアをしていた方の動機の違いを明らかにする。	対象は、ワシントン州在住の 50 ～ 80 歳の女性のうち、ランダムサンプリングによって選ばれた 1,104 人。コンピュータ支援電話による面接法により、属性、健康特性、ボランティア活動の有無や経験、VFI (Clary, 1998) によるボランティア動機について調査した。	ボランティアをしていない方は結婚している可能性が低く、白人が少なかった。ボランティアをしている 1 / 3 の方が健康組織に所属していることから、健康意識が高いことがうかがえた。t 検定の結果、VFI (Clary, 1998) のうち、価値、社会、知識、自尊感情の 4 つにおいて、過去にボランティア経験のある方より現在ボランティアをしている方が高値を示した ($t = -2.01 \sim -4.21$, $p < 0.01$)。さらに、重回帰分析により、高齢女性において、現在ボランティア活動に参加していることはボランティア動機の予測因子となりうるが、高齢者の場合、動機のうち 1 つであるキャリアとの関連はないことが明らかになった。
桜井政成 (2002)	ボランティア活動に参加する人々の参加動機構造を分析し、妥当性を検討する。	MTV 尺度を用いた質問紙調査であり、対象は京都市内のボランティア 287 名で年齢や性別は問わない。因子分析を行い、全国調査との比較を行う。	参加動機項目を因子分析した結果、「自分探し」因子、「利他心」因子、「理念の実現」因子、「自己成長と技術習得・発揮」因子、「レクリエーション」因子、「社会適応」因子、「テーマや対象への共感」因子が抽出された。信頼度は、第 6 因子がやや低い数値 ($\alpha = 0.680$) であったものの、その他の因子は $\alpha = 0.75$ 以上であった。さらに一元配置分散分析の結果、高い妥当性が示された。
小林江里香 深谷太郎 (2005)	中高年におけるボランティアニーズと回答者の属性について明らかにする。	東京都練馬区に在住の中高年 (60 ～ 74 歳) 628 名を対象に質問紙調査を行った。	活動の頻度が月 1, 2 回程度であること、歩いて行ける距離に活動場所があること、活動費用の自己負担がないことが、ボランティア活動の参加条件として好まれることが明らかになった。
松本渉 (2007)	職場とのコミットメントと NPO への参加行動の関係を改めて議論する。	JGSS により得られた 2023 の個票データを用いて、NPO やボランティア活動への参加行動を非本業型の社会貢献活動と捉え、現在の職場に対するコミットメントに相反するという仮説に基づき分析を行った。	NPO やボランティア活動への「参加意欲」と職場へのコミットメントなどの「就労観」の 2 つの変数は無相関であった。そこで、社会の諸問題に対する「意思表示の有無」と、知的好奇心の反映として「1 か月の読書が 3 冊以上かどうか」によるグループ分割により層別解析を行った。その結果、分割された集団の片方では、「参加意欲」と「就労観」の間に負の相関が見られた。このことから、自分自身と職場を一体視しない人々は、職場とは別の場所で社会貢献を実現したり、利他的な行動をとったりする可能性が高いといえる。

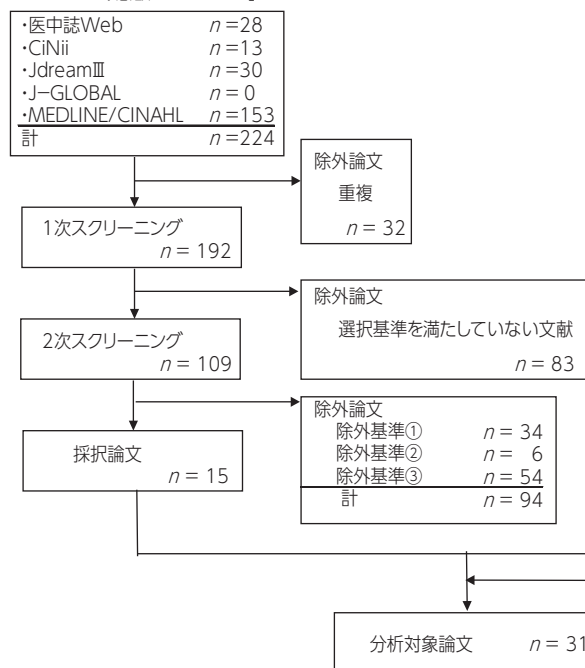
表 1-3 ハンドサーチの文献 11 件 (続き)

著者名 / 発表年	研究目的	対象者と研究方法	主な結果
奥山尚子 (2009)	地域ボランティア活動の 決定要因を明らかにする。	2006 年の日本版総合的社会調査の個票データ (JGSS-2006) を用いた経済学的分析。データは 層化二段無作為抽出法によって抽出された全国に 居住する 20 歳から 89 歳の男女で有効回答数は 2124 である。	属性では、配偶者や義務教育課程の子どもの存 在、町内会などの地縁組織の所属が地域ボラン ティア活動への参加を高めるといった結果が示 されており、商店・事業所の多い地域や古くか らの住宅地、集合住宅の居住ではボランティア 活動への参加が低い。ボランティア活動の参加 意思決定に影響がないのは、居住環境に対する 満足や居住継続意思、所得や就労時間、賃金率、 環境問題に対する政府の支出であった。また、 ボランティア活動の参加に伴う時間的、経済的 コストは参加確率には影響を与えない。このこ とから、個人のネットワークの深さや世帯構成 から生まれる地域社会とのつながりが地域のボ ランティア活動の参加を高めることを示唆して いる。
宮下智葉 田高悦子 伊藤絵梨子 有本梓 大河内彩子 白谷佳恵 (2017)	地域在住要支援高齢者あ の健康長寿の延伸に向け た社会活動の実態と関連 要因を明らかにすること。	関東圏 A 市在住の 65 歳以上のうち、無作為抽出 された要支援 1・2 の者 300 人を対象に、質問 紙調査を行った。従属変数は社会活動であり、独 立変数は個人要因と環境要因である。	多重ロジスティック回帰分析の結果、自分や周 围の人々の生活を管理する能力を示す生活マネ ジメントと、携帯電話やパソコンなどの新機器 利用能力、情報収集能力と社会活動の間に有意 な正の関連を認めた。
塚本利幸 舟木紳介 橋本直子 永井裕子 (2018)	社会問題への関心や認知 等がボランティア活動の 参加に関わっているかを 明らかにし、アクティブ シニアの社会問題への関 心について検討する。	60 歳から 80 歳までの福井県在住の一般市民から 無作為抽出した 2000 人を対象にアンケート調査 を実施した。因子分析や順位相関係数の算出等 により、対象者の社会に対する考え方の傾向とボラ ンティア活動についての関係性を検討した。	社会問題への関心の程度が高いほど、ボラン ティア活動への参加が促進していた。ボラン ティア活動の活性化に向けた前提条件として、 社会的な格差の是正や社会的ネットワークの構 築が重要であることが確認された。
伊藤順子 (2019)	高齢者ボランティア活動 の意義と課題について、 特に参加動機とボラン ティア活動満足感、活動 から得た利益及び生活満 足度との関連を明らかに する。	ボランティア活動をしている 60 歳以上の高齢者 229 名を対象にした質問紙調査で、相関分析と多 元配置分散分析を用いた。	参加動機として、自己志向性と他者志向性を併 せ持つ人ほど、ボランティア供給時間が長かつ た。ボランティア活動満足感、ボランティアか ら得た利益には、活動動機の自己志向性と他者 志向性に有意な関連があった。両志向性がとも に高いほど、ボランティア活動満足感、ボラン ティア活動から得た利益が多いこと、両志向性 がともに低いほど活動満足感も得られた利益も 少ないことが示された。また、生活満足度は活 動動機と有意な関連はなかった。

○キーワード「高齢者/older」

「ボランティア活動/Volunteer」

「意欲/motivation」



○キーワード「ボランティア/Volunteer」

「参加/participation」

「条件/condition」

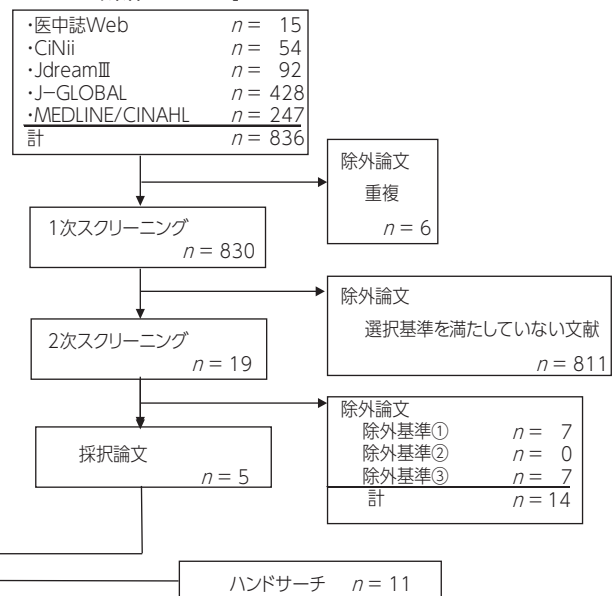


図 1 文献選択の過程

表 2-1 参加意欲

カテゴリー	コード (著者名、発行年)
利己的な動機	生産的である (Okun,1994)、時間やお金に余裕がある (日下,篠置, 1998) 自分自身の生活の充実や生きがいをもつため (日下,篠置, 1998) 技術の習得や自己成長感を求めてボランティア活動を始める (桜井,2002) 活動自体を楽しむことを望む (桜井,2002) 空いている時間に何か意味のあることをしたい (Pardasani, 2018) 自尊心を高め、必要と感じ、自分の気分を良くする (Dury,2018) 楽しみがある (withall, et al., 2018)、孤独を避け、必要とされる (withall, et al., 2018)
利他的な動機	他者を助けるため (Okun,1994) 利他的な動機 (桜井,2002) ほかの人を助けるのが好きなので (Dury,2018) 自分の能力を社会に還元したり、人の役に立てたい (日下,篠置, 1998)
義務的・使命的動機	道徳的義務 (Okun,1994)、使命感や信念 (Kovacs,Black,2000) 社会適応的で、他律的に参加する姿勢 (桜井,2002) 理念を実現したい姿勢 (桜井,2002) 親切にすることに責任を感じる (Witucki ,et al.,2011)
宗教的理由	宗教的理由 (Kovacs,Black,2000)、神はやるべきだと示している (Witucki ,et al.,2011)
その他	共感的な意識に基づく動機 (桜井,2002) 市民の一員とを感じるなどの結びつき (Witucki ,et al.,2011) 母の姿を見てきたので、助け合う環境で育ったので (Witucki ,et al.,2011) 社会への恩返し of 気持ち (Pardasani, 2018)、自己志向性と他者志向性を併せ持つ (伊藤,2019)

表 2-2 活動条件

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (著者名、発行年)
無理なく充実した活動	無理のない活動形態	高齢者の健康状態や関心、スケジュールなどに適した活動 (Levasseur, Routhier, Clapperton, Doré, & Gallagher, 2020) 達成感や活動成果 (Kovacs, Black,2000)、活動費用の自己負担がない (小林, 深谷,2005)、活動が月 1, 2 回であること (小林, 深谷,2005)
	充実した活動内容	トレーニングを含むプログラム (Warburton, Paynter, & Petriwskyj, 2007) 障壁として年齢差別やスキルや経験が活かせない、活動がつまらないこと (Warburton, Paynter, & Petriwskyj, 2007)
活動しやすい環境	家族の存在	配偶者や義務教育課程の子どもの存在が地域ボランティア活動への参加を高める (奥山,2009) 家族の理解と協力があること (服部ら, 2011)、未亡人、離婚、独身など、家族を有していない (Principi, Warburton, Schippers, & Rosa, 2013)
	アクセスのよい環境	交通の便が良い (高橋、柴崎、永井、2003)、歩いて行ける距離に活動場所があること (小林, 深谷,2005)、活動場所が自宅に近いこと (服部ら, 2011) 高齢者のボランティア活動に参加する際の促進因子は送迎で、阻害因子はアクセスの難しさ (withall, et al., 2018) 通う手段が確保されていること (福島, 2020)、アクセシビリティなど物理的環境に合った活動 (Levasseur, Routhier, Clapperton, Doré, & Gallagher, 2020)
	仲間の存在	ボランティア活動を促進するような先輩やメンターの存在の必要性が言及されていた (Kovacs,Black,2000) 身近な人と一緒に参加できること (服部ら, 2011)、促進因子は仲間の存在で、阻害因子は単独での出席 (withall, et al., 2018) 友人を通して応募する人が多い (Kovacs,Black,2000)、世代間の交流の機会 (Warburton, Paynter, & Petriwskyj, 2007) 個人的な誘い (Levasseur,Routhier, Clapperton, Doré, Gallagher,2020)、友人・知人と一緒にできること (福島, 2020)
	その他	政策による保護 (Warburton, Paynter, & Petriwskyj, 2007)、多様性を認める組織文化 (Warburton, Paynter, & Petriwskyj, 2007) 年齢差別や若者が必要とされている場合は活動の障壁になる (Warburton, Paynter, & Petriwskyj, 2007)
個人的能力	余裕がある	賃金率といった経済学的な要因 (跡田, 福重,2000)、活動できる時間的余裕があること (服部ら, 2011) 年収 5 万ドル以上の人がボランティアを行っている (Pardasani,2018) 社会活動が活発な高齢者の特徴として暮らし向きが普通以上であることが挙げられる (桂, 佐藤, 2017)
	健康状態	健康であること (服部ら, 2011; Witucki ,et al.,2011; Levasseur,Routhier, Clapperton, Doré, Gallagher,2020) 健康意識が高いことがうかがえた (Bowen,Andersen,Urban,2000)。健康志向が高く、健康不安が無いこと (伏木, 2012) 転倒の不安が強いことや、高血圧や脳卒中などの既往は、活動への意欲低下に関連する (伏木ら, 2012)、健康状態がよいことが動機の一部と負の相関を示した (Principi, Schippers, Naegele, Di Rosa, Lamura, 2016) うつ病の症状はボランティア活動への関与とマイナスの関連が見られた (Principi,et al.,2016)
	社会との繋がりや、社会への関心がある	老人クラブの入会 (高橋、柴崎、永井,2003)、町内会などの地縁組織の所属 (奥山,2009)、積極的に社会参加していること (伏木,2012) 外出等への誘いがある (桂, 佐藤,2017)、スポーツおよび学習活動への活動参加意向がある (桂, 佐藤,2017) 社会問題への関心が高い (塚本、舟木、橋本, 永井,2018)
	情報収集能力	情報収集能力 (宮下ら,2017)、携帯電話やパソコンなどの新機器利用能力 (宮下ら,2017) 情報を得ている (Levasseur,Routhier, Clapperton, Doré, Gallagher,2020)
	学歴	学歴の重要性がうかがえた (跡田, 福重,2000)、最終学歴が大学院の人 (Pardasani,2018) 教育レベルが中等度・高度であることが動機の一部と負の相関を示した (Principi, Schippers, Naegele, Di Rosa, Lamura, 2016)
	生活能力	高次の日常生活動作を有すること (伏木,2012)、自分や周囲の人々の生活を管理する生活マネジメント (宮下ら,2017)
	その他	ボランティア経験がある (Bowen,Andersen,Urban,2000) 年齢が高い (金,2004)、本村に居住していること (金ら, 2004)、地域共生意識が高いこと (金ら, 2004) 自分自身と職場を一体視しない人々は、職場とは別の場所で社会貢献を実現する可能性が高い (松本,2007) 自己効力感、SDT の態度と主観的規範、及び知覚された行動制御、TPB の統合された規制 (Grano,Lucidi, Zelli,Violani,2008) 仕事の状況 (Principi,Warburton, Schippers,Rosa,2013) ジェネラティビティ (Espanés,Villar, Urrutia, Serrat,2015)、宗教 (Okun, O'Rourke, Keller, Johnson, Enders, 2015) 高齢者住宅での生活はボランティア活動に積極的な影響を与える (park, kim, & cho, 2017)、女性 (Pardasani,2018)、69 歳以上の人 (Pardasani,2018)

ア活動の参加動機を因子分析した際、技術の習得や自己成長感を求めて活動を始めるといった因子を抽出している。同様に、日下、篠置（1998）も自己実現因子を抽出している。桜井（2002）はこの他に、活動自体を楽しむという内容の因子を抽出しており、Withall, et al.,（2018）も、インタビューから活動理由として楽しさを抽出していた。この他に、空いている時間に意味のあることをしたい（Pardasani, 2018）や時間やお金に余裕がある（日下、篠置, 1998）等が見られた。

【利他的動機】では、Okun（1994）が、実態調査でボランティア動機について尋ねた際、最も多かったのは他者を助けるため（83%）であったことを明らかにしている。他には因子分析により、社会的貢献因子（日下、篠置, 1998）や利他心（桜井, 2002）という因子が抽出されていた。

さらに、道徳的義務や（Okun, 1994）使命感、信念を挙げている文献もみられた（Kovacs, Black, 2000）。これらは、「しなければならない」といった意味合いがあり、明確に利己的とも利他的とも区別されないため、【義務的・使命的動機】と命名し分類した。

また、Witucki, et al.（2011）、Okun, O'Rourke, Keller, Johnson, Enders,（2015）、Kovacs, Black（2000）が宗教的理由を述べており、【その他】では社会への恩返し（Pardasani, 2018）や、自己志向性と他者志向性を併せ持つこと（伊藤, 2019）等が示された。

1. 活動の条件

活動の条件は、【無理なく充実した活動】、【活動しやすい環境】、【個人の能力】に分類された。

【無理なく充実した活動】は、〈無理のない活動形態〉と〈充実した活動内容〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈無理のない活動形態〉では、活動が月1、2回であることや、活動費用の自己負担がないこと（小林、深谷, 2007）、高齢者に合った活動（Levasseur, Routhier, Clapperton, Doré, & Gallagher, 2020）がボランティアのニーズとして挙げられていた。また、Warburton, Paynter, & Petriwskyj（2007）は、ボランティアに対する促進因子と阻害因子について質問紙調査により、促進因子にトレーニングを含む内容を、阻害因子に年齢差別があること、経験を活かさないこと、活動がつまらないことを示していた。これにより、〈充実した活動内容〉が抽出された。

【活動しやすい環境】は、〈家族の存在〉、〈アクセ

スのよい環境〉、〈仲間の存在〉のサブカテゴリーから成る。〈家族の存在〉では、服部（2011）が質問紙調査により、ボランティア活動への参加条件として、家族の理解と協力があることを挙げていた。奥山（2009）も配偶者や義務教育課程の子どもの存在が地域ボランティア活動への参加を高めていると述べているが、反対にPrincipi, Warburton, Schippers, & Rosa（2013）は、家族を有していないことがボランティア活動動機の一部と正の相関を示したという意見を述べている（ $\beta = 0.25 \sim 0.39, p < 0.001$ ）。

〈アクセスのよい環境〉では、送迎（Withall, et al., 2018）や、通う手段が確保されていること（福島, 2020）等のアクセスに関する内容があった。

〈仲間の存在〉では、身近な人（服部ら, 2011）や、友人・知人（福島, 2020）と一緒に参加することが挙げられた。また、ボランティア活動を促進する先輩やメンターの存在の必要性も言及されていた（Kovacs, Black, 2000）。

【個人の能力】は〈余裕がある〉、〈健康状態〉、〈社会との繋がりや関心がある〉、〈情報収集能力〉、〈学歴〉、〈生活能力〉等に分けられた。

〈余裕がある〉では、活動できる時間的余裕があること（服部ら, 2011）と、暮らし向きが普通以上（桂, 佐藤, 2017）等の経済的な余裕が述べられていた。〈健康状態〉では、健康状態が良いことがボランティア活動動機の一部と負の相関（ $\beta = -0.26, p < 0.05$ ）を示すという結果（Principi, Schippers, Naegle, Di Rosa, & Lamura, 2016）がみられたが、健康であることや（服部ら, 2011; Witucki, et al., 2011; Levasseur, Routhier, Clapperton, Doré, Gallagher, 2020）、健康志向が高く、健康不安がないこと（伏木ら, 2012）が複数の研究者から抽出されていた。さらに、ボランティア活動にマイナスの影響が生じる可能性があるとして、転倒の不安が強いことや、高血圧や脳卒中などの既往が有ること（伏木ら, 2012）、うつ病の症状が指摘されていた（Principi, et al., 2016）。〈社会との繋がりや関心がある〉では、老人クラブ（高橋, 柴崎, 永井, 2003）や町内会（奥山, 2009）に所属していることや、社会問題への関心が高い（塚本, 舟木, 橋本, 永井, 2018）ことが挙げられた。この他には、携帯電話やパソコンを使用できる（宮下ら, 2017）という〈情報収集能力〉、高次の日常生活動作を有することや（伏木, 2012）、生活マネジメント力を有する（宮下ら, 2017）といった〈生活能力〉、〈学歴〉

等が抽出された。

V. 考察

1. 参加意欲について

結果から、高齢者のボランティア活動意欲に様々な動機があることが示された。【利他的動機】はボランティアの定義である「個人の自由意思に基づき、その技能や時間帯を進んで提供し、社会に貢献すること」（文部科学省生涯学習審議会，1992，p.126）の「貢献」に相当し、ボランティアの本質であると考えられる。しかし、本研究では【利他的動機】の他に、自己実現等の【利己的動機】も抽出された。これは、近年ボランティア活動による健康的な効果も複数報告される等（藤原，杉原，新開，2005；津田，2013）、他者のためだけでなく、活動者にも利益があることが影響していると考えられる。ボランティア活動に参加している高齢者に参加理由を尋ねた調査（内閣府，2006）によると、「自分自身の生きがいのため」、「自分の知識や経験を生かす機会が欲しい」等と回答した割合が多いことから、利他的動機だけでなく、利己的動機を持ち合わせている場合が考えられる。伊藤（2011）は利他的動機と利己的動機は明確に線引きすることは困難であると述べており、本研究でも区別が難しい義務的・使命的動機が抽出された。また〈その他〉では、社会への恩返しの気持ち等の互惠的な動機が示された。ボランティア活動動機には、互惠的動機が存在することは明らかであるという意見（伊藤，2011）もあり、互惠的な動機に関しては更なる研究の蓄積が必要である。

宗教的理由は国外の研究によって抽出されており、宗教的文化の違いから国内の高齢者に該当しない可能性もあり、今後検討が必要と考えられる。

以上より、高齢者のボランティア活動に対する動機には様々な動機があることを踏まえ、ボランティア活動の啓発には、他者の助けになるといったボランティア活動の本質的意義だけでなく、活動を通して自己実現を図ることが出来る等の活動者のメリットも伝えていく必要があると考えた。

2. 活動の条件

活動の条件では、【無理なく充実した活動】、【活動しやすい環境】、【個人的な活動条件】が挙げられた。【無理なく充実した活動】は、〈無理のない活動

形態〉と〈充実した内容〉に分けられた。高齢者は、退職者や年金受給者が多く、経済的に不安を抱えやすいことや、加齢性変化や疾患の影響から健康的不安も抱えやすいことが推測され、これらの要因がボランティア活動の動機に影響を与えと考えられる。これにより、ボランティア活動が自分に無理のない活動なのか考えることはごく自然な事と考えられる。さらに、高齢者は長年身に着けたスキルや豊富な経験を有するため、これらが活かされるような〈充実した活動内容〉がボランティア活動参加の条件となると考えた。

また、【活動しやすい環境】では、〈家族の存在〉や〈仲間の存在〉、〈アクセスのよい環境〉等がボランティア活動参加の条件であることが示唆された。

Principi, Warburton, Schippers, & Rosa (2013) は、家族を有していないことを挙げているが、その他国内の研究者（奥山,2009;服部ら,2011）は家族を有していることをボランティア活動の条件として挙げている。Markus & Kitayama (1991) は、東洋と西洋で自己観が異なると述べており、アメリカでは、自己は周囲の人間と本質的に切り離された相互独立的なものであるのに対し、日本では、自己は周囲の重要な他者と繋がっているという認識を持ち、集団の成員として調和を保つように動機づけられていると述べている。このことから、日本文化特有の自己と家族の一体感が高齢者のボランティア活動参加に影響していると考えられる。

さらに高齢者は加齢性変化や疾患による身体能力の低下や自動車免許証の返納等により移動能力や手段が限られてくる。このため、ボランティア活動参加の際は、〈アクセスのよい環境〉が条件として求められると考えられる。

〈仲間の存在〉については、高齢者は若年者と比べ社会適応的な動機、つまり友人や知人との交流の場としてボランティア活動へ参加するという意見や（中原,2019）、高齢期の特徴として、ソーシャルネットワークの縮小や社会的役割の減少が見られるため、高齢者がボランティア活動に参加する際には仲間の存在が大きいことが考えられる。

以上から、高齢者に合った無理のない活動形態にすることや、活動内容を充実させること、アクセスのしやすさ等、高齢者が活動しやすい環境に整えることがボランティア活動参加への促進につながると考えられる。

また、本研究では、ボランティア活動そのものや

環境だけでなく、ボランティア活動に参加する際に必要な【個人的な活動条件】も抽出された。健康状態を崩しやすい高齢者にとっては、健康であることはボランティア活動に参加する際に重要な条件となることが考えられる。〈健康状態〉が良いことだけでなく、ある程度自立した〈生活能力〉を有すること、さらにはボランティア活動の情報を入手できるような〈情報収集能力〉を有すること、既に町内会や老人クラブ等に参加している等、〈社会とのつながり、または関心がある〉ことや時間や経済的に〈余裕のある〉ことがボランティア活動に参加する条件と言える。しかし、どのような状態であろうとも、本人にボランティア活動への参加意欲がある際は、可能な限り参加できるような支援が必要である。高い情報収集能力を有していない高齢者にもボランティア活動の情報が行き届くように広報の方法を工夫したり、健康状態や生活能力が不安定であるといった特徴のある高齢者に適した活動内容や方法を検討していくことが、高齢者にとっての地域ボランティア活動支援となると考えた。具体的な支援方法やどのような方法が効果的かについては今後の課題である。

VI. 結語

高齢者の地域ボランティア活動について、31文献を検討した結果、以下の内容を確認することができた。高齢者の地域ボランティア活動の参加意欲は、【利己的動機】、【利他的動機】、【義務的・使命的動機】、【宗教的理由】及び【その他】が示された。活動条件では【無理なく充実した活動】、【活動しやすい環境】、【個人的な活動条件】が抽出された。

これにより、高齢者の地域ボランティア活動参加の際には、健康状態や高齢者のニーズに合わせた支援が必要であることが示唆された。

なお、この研究は博士論文の一部を修正、加筆したものである。本研究の第一著者である藤谷未来は研究の計画や文献の検索、分析を行い、原稿を作成した。第二著者である西片久美子は原稿の示唆を行った。

文献

跡田直澄, 福重元嗣 (2000). 中高年のボランティア活動への参加行動—アンケート調査個票に基づく要因分析—. 季刊社会保障研究, 36 (2), 246-255.

- Bowen, D. J., Andersen, M. R., & Urban, N. (2000). Volunteerism in a Community – Based Sample of Women Aged 50 to 80 Years 1. *Journal of Applied Social Psychology*, 30 (9), 1829-1842.
- de Espanés, G. M., Villar, F., Urrutia, A., & Serrat, R. (2015). Motivation and commitment to volunteering in a sample of Argentinian adults: what is the role of generativity?. *Educational Gerontology*, 41 (2), 149-161.
- Dury, S. (2018). Dynamics in motivations and reasons to quit in a Care Bank: a qualitative study in Belgium. *European journal of ageing*, 15 (4), 407-416.
- 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二 (2005). ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. *日本公衆衛生雑誌*, 52 (4), 293-307.
- 福島忍 (2020). 高齢者の社会貢献活動の取り組みの現状と取り組めるきっかけおよび条件: 性別および社会貢献活動への意向別の検討 (特集 高齢者をとりまく人と社会). *厚生指標= Journal of health and welfare statistics*, 67 (7), 9-17.
- 伏木康弘, 大西浩文, 大浦麻絵, 尚和里子, 坂内文男, 北澤一利, 森満 (2012). 地域ボランティア参加意志を持つ高齢者の特性—石狩, 空知振興局管内4市3町の在住者への調査—. *北海道公衆衛生学雑誌*, 25 (2), 139-146.
- Grano, C., Lucidi, F., Zelli, A., & Violani, C. (2008). Motives and determinants of volunteering in older adults: An integrated model. *The International Journal of Aging and Human Development*, 67 (4), 305-326.
- 服部愛子, 畑瀬友紀子, 平野千晶, 藤村薫, 前原佳織, 松本彩花, 光井絵里, 宮園知子, 吉中愛美, 小田美紀子, 落合のり子 (2011). 地域活動への住民参加を促すための保健師の支援方法. *島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要*, 5, 149-160.
- 伊藤順子 (2019). 高齢者のボランティア活動参加動機とボランティア活動満足感, 活動から得た利益および生活満足度との関係. *高齢者のケアと行動科学*, 24, 42-52.
- 伊藤忠弘 (2011). ボランティア活動の動機の検討. *研究年報/学習院大学文学部*, (58), 35-55.
- 桂理江子, 佐藤直由 (2017). 地域在住高齢者にお

- ける社会活動の関連要因: 仙台市を事例として. 保健福祉学研究, 15, 1-10.
- 見坊豪紀, 市川孝, 飛田良文, 山崎誠, 飯間浩明, 塩田雄大 (2022). 三省堂国語辞典 第8版.(p.698). 三省堂.
- 小林江里香, 深谷太郎 (2005). 都市部の中高年者におけるボランティア活動のニーズの分析. 老年社会科学, 27 (3), 314-326.
- 公益財団法人さわやか福祉財団 (2019). より継続的で、より深いボランティア活動を推進するために いわゆる有償ボランティアのボランティア性. 3-4.
- Kovacs, P. J., & Black, B. (2000). Volunteerism and older adults: Implications for social work practice. *Journal of Gerontological Social Work*, 32 (4), 25-39.
- 日下菜穂子&篠置昭男 (1998). 中高年者のボランティア活動参加の意義. 老年社会科学= Japanese journal of gerontology, 19(2), 151-159.
- 金貞任, 新開省二, 熊谷修, 藤原佳典, 吉田祐子, 天野秀紀&鈴木隆雄 (2004). 地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因—埼玉県鳩山町の調査から—. 日本公衆衛生雑誌, 51(5), 322-334.
- Levasseur, M., Routhier, S., Clapperton, I., Doré, C., & Gallagher, F. (2020). Social participation needs of older adults living in a rural regional county municipality: toward reducing situations of isolation and vulnerability. *BMC geriatrics*, 20 (1), 1-12.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Cultural variation in the self-concept. In *The self: Interdisciplinary approaches* (pp. 18-48). New York, NY: Springer New York.
- 松本渉 (2007). ボランティア活動や非営利組織への参加と就労観. 日本版 General Social Surveys 研究論文集, 6, 83-94.
- 宮下智葉, 田高悦子, 伊藤絵梨子, 有本梓, 大河内彩子, 白谷佳恵 (2017). 地域在住要支援高齢者における社会活動の実態と関連する要因の検討. 日本地域看護学会誌, 20 (2), 12-19.
- 文部科学省 生涯学習審議会 (1992). 今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について (中間まとめ). <http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakaifukushi/447.pdf>. [2020.3.31閲覧]
- 内閣府(2006).平成18年高齢社会白書. 第1章 第3節 人口減少社会における高齢者の能力発揮.2ボランティア活動.https://www8.cao.go.jp/kourei/white_paper/w-2006/zenbun/html/i1321000.html [2024.1.5閲覧]
- 中原純 (2019). よくわかる高齢者心理学 (p.133). ミネルヴァ書房.
- 新村出 (2018). 広辞苑 第7版 (p.213). 岩波書店.
- 岡本栄一 (2005). ボランティアのすすめ, (p.24). ミネルヴァ書房.
- Okun, M. A. (1994). The relation between motives for organizational volunteering and frequency of volunteering by elders. *Journal of Applied Gerontology*, 13(2), 115-126.
- Okun, M. A., O'Rourke, H. P., Keller, B., Johnson, K. A., & Enders, C. (2015). Value-expressive volunteer motivation and volunteering by older adults: Relationships with religiosity and spirituality. *Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 70(6), 860-870.
- 奥山尚子 (2009). 地域ボランティア活動の決定要因. 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集, 9, 107-120.
- 大上真一 (2015). 「第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」からみた高齢者の社会参加・社会貢献 —日本、アメリカ、ドイツ、スウェーデンの特徴について—.
- 大坂ボランティア協会 (1997). 基礎から学ぶボランティアの理論と実際, (p.5). 中央法規出
- Pardasani, M. (2018). Motivation to volunteer among senior center participants. *Journal of gerontological social work*, 61 (3), 313-333.
- Park, S., Kim, B., & Cho, J. (2017). Formal Volunteering among Vulnerable Older Adults from an Environmental Perspective: Does Senior Housing Matter?. *Journal of Housing for the Elderly*, 31 (4), 334-350.
- Principi, A., Galenkamp, H., Papa, R., Socci, M., Suanet, B., Schmidt, A., Schulmann, K., Golinowska, A., Sowa, A., Moreira, A. & Deeg, D. J. (2016). Do predictors of volunteering in older age differ by health status?. *European Journal of Ageing*, 13, 91-102.
- Principi, A., Schippers, J., Naegle, G., Di Rosa,

- M., & Lamura, G. (2016). Understanding the link between older volunteers' resources and motivation to volunteer. *Educational Gerontology*, 42 (2), 144-158.
- Principi, A., Warburton, J., Schippers, J., & Rosa, M. D. (2013). The role of work status on European older volunteers' motivation. *Research on Aging*, 35 (6), 710-735.
- 桜井政成 (2002). 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析. *ノンプロフィット・レビュー*, 2 (2), 111-122.
- 高橋美保子, 柴崎智美, 永井正規 (2003). 老人クラブ会員の社会活動レベルの現状. *日本公衆衛生雑誌*, 50 (10), 970-979.
- 津田理恵子 (2013). 回想法の技法を活用した地域作りへの取り組み—回想法実践者養成講座の振り返りから考える今後の展望—. *日本看護福祉学会誌*.18巻,2号.67-78.
- 塚本利幸, 舟木紳介, 橋本直子, 永井裕子 (2019). アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件: 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から6. *福井県立大学論集* (52), 59-87.
- Warburton, J., Paynter, J., & Petriwskyj, A. (2007). Volunteering as a productive aging activity: Incentives and barriers to volunteering by Australian seniors. *Journal of Applied Gerontology*, 26 (4), 333-354.
- Withall, J., Thompson, J. L., Fox, K. R., Davis, M., Gray, S., De Koning, J. & Stathi, A. (2018). Participant and public involvement in refining a peer-volunteering active aging intervention: Project ACE (Active, Connected, Engaged). *The Gerontologist*, 58 (2), 362-375.
- Witucki Brown, J., Chen, S. L., Mefford, L., Brown, A., Callen, B., & McArthur, P. (2011). Becoming an older volunteer: A grounded theory study. *Nursing Research and Practice*, 2011.